

「三〇」熟語⑨三悪

企業経営漫談士 岡野実空

仏道でいう「三悪」とは、「三悪道」の略。衆生が輪廻する「六道」の内、地獄・餓鬼・畜生の悪しき三途(さんず)のこと。それはこれまで種々に形を変え、社会やさまざまな組織の「三悪追放」運動に転用されてきました。ここでは先の「三毒」(貪瞋痴)に続く、「六大煩惱」の残り「慢疑見」を、マネジメントの「三悪」として取り上げます。

その1: 「慢」 驕慢

「慢」とは、「驕慢」や「高慢」の意。驕る平家は久しからず！古今東西、猛き人も遂には滅び、風の前の塵となることは、歴史に学ぶ第一です。

しかし今の我が国を見ると、30年前の経済バブルの悔恨だけを引かず、社会がその教訓を上手く活かせていないことに気づきます。またその影響をまともに受けた若者の多くは、保守的かつ「謙虚」。「驕慢」とは対極にあるものの、若者に固有な「角」が少なく、大人しい印象を受けます。

因みにその特権の一つ、「失敗する権利」を行使しないまま若者を卒業すると、「臆病」な大人になることは必定。とはいえその一部は、いずれ然るべき地位に就き、重大な決断を求められることとなります。そのとき「失敗」から体得した「知見」を持たないのは致命傷。そしてその個人ばかりか組織が、大きな代償を払うことになるのです。

その2: 「疑」 疑念

本来の「疑」とは、仏の教えに対する「疑念」。修行の過程で、理解不十分な原因を己に求めず、釈尊の教えを「疑う」ことを意味します。

近年でいえば、円覚寺の夏期講座の折に拝聴した、養老孟司先生の嘆きがその適例。それは母校での講義中、ときに一部の男子学生から寄せられる、「分かるように説明してください」という要望。「自分に分らないことはない」という「高慢」に、だから「教え方が悪い」という「疑念」が折り重なったもの。老先生はそれに、「君は、お産の痛みがわかるのか？」という逆質問で対抗するそうですが、果たしてその意味はつうじるのでしょうか。

何でもスマホで検索、というクセが身に付いてしまった人間が失うのは、自分で考える力。そしてそれをもとに仲間と切磋琢磨することなしに、真の成長はありません。大人といえども、まず「疑う」べきは、自分の未熟さです。

「三々な経営」

O-6 一流企業の条件②三位一体経営
E-3 ワークライフ・バランスの段階

「四字熟語」で考える経営戦略

Y-02 「外部環境」を考える・その1
Y-08 「実践計画」を考える・その1

その3: 「見」 偏見

「見」とは「偏見」、すなわち偏った見方のこと。人間の知識や能力、経験に差がある以上、同じ事象を見聞きしても、個々人の解釈はまちまち。それに耳を傾け、異なる考え方や意見に耳を傾けることは、自分の幅だけでなく、住む世界を広げます。

それに関し特に反省すべきことは、過度の「属人性」。すなわち「誰」が言ったか、「誰」の意見かを意識し過ぎ、自ら「選択」の幅を狭めてしまう私たちの傾向です。因みにこのコラムでも取り上げた、京都某社のワンマン経営者。かつてセミナーを担当し、参加者を通じてその宗教的な実像を知る度に、嫌悪感を抱くようになりました。しかし氏の著作となれば、話は別。そこに書かれている内容は、自らの経験に裏打ちされた、真の『実学』。本人に仕えることは絶対ご免被るとしても、実業人の必読図書として推薦することに異議はありません。

さて「慢疑見」という上記「三悪」。しかし今我が国社会を見渡し、総じて気になるのは、先にも挙げたそれとは真逆の実態。「謙虚」で「素直」、かつ「均整」の取れた若者(特に男性)の多さです。

それら美德も、過ぎたるは猶及ばざるが如し！

近世の英国が生んだ傑作、『高慢と偏見』。さらに『懷疑』を加えた「三悪」を駆逐し、社会をハッピーに導くのは、いまの我が国においても、やはり澆漓とした知性をもった女性たちのようです。

2021年7月12日 実空